

机邊だより

倉 橋 惣 三

スタンレーホール氏の此の論文は十年程前のもので新しいものではありません。併しその堂々たる所論は今尙我國の幼稚園の爲に不尠参考になると信じ、茲に敷號に互つて委しく御紹介することにしました。

○幼稚園の改良

(スタンレーホール氏)

序 論

幼稚園の發達は極めて近代の事に屬して居るのであります。他の學校教育は色々の方面から研究せられ、種々の異つた學說や學派が現はれて根本問題を討議し、又之れを實際に應用し研究しました結果、順次發達して來たのであります。獨り幼稚園のみは全く舊態を保持して、フレーベルの唱へた理論と、實際に行つた所とを唯一の目的として來たのであります。然るに最近に至りまして、

兒童研究が開け、又發達心理學が研究せられるやうになり、其の上兒童の身體的發達を衛生學の方面から研究するやうになりました結果、幼稚園に關する問題が八釜敷くなつたので有ります。即ち二派に分れて、一方は今日フレーベル主義などを墨守して居てはならない、大に研究を進めて幼稚園の改革を計らねばならないと云ひ、他方は之れに反して何處までもフレーベル主義の權威を認めて行かうとして、此れ迄行はれた種々の新研究も只此の主義を敷衍し、確證するだけに止まつた、所謂新方法も僅か一部分の事柄に就いては有効であらうが、然し之れを以てフレーベルが實驗し證明した方法を排斥することは出来ない、何處までも根本主義としては此れを採らねばならぬと固執するのであります。

私は今此の二主義に就いて其の是非を定めやうとするのではない、私の目的とする所は、斯る議論を引き起こし、斯る議論の奥底に横はつて居る根

本問題に就いて、之れを近世心理學の發達に照して研究したいと思ふのであります。充分に論ずることは出来ないのであります。大體の筋道だけは明かにしやうと思ひます。便宜の爲め問題を三つに分けまして、

第一、には幼稚園の奥底に横はつて居る哲學上及び教育上の原理を論じ。

第二、には遊戯のことを論じ。

第三、には幼稚園の衛生に就いて論じやうと思ふのであります。

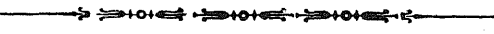
第一、フレーベルの哲學的原理

フレーベルは十九世紀が生み出した教育者の中で最も偉大な教育者、教育的天才であることは今日少しも疑ひない所であります。彼れ以前にあつても幼児の教育の大切なことを説いたものは多くあつたのであります。彼れほど強く、彼れほど明かに之れを認めたものはないのであります。ベスタロツチは兒童の衝動を遊戯に利用することを説

いたのであります。彼れは社會上、及び道徳上の改革に熱注致しました餘り、此れを單に職業と云ふ方面からのみ觀て居りました。ルーソーも自由な活動、自由な遊戯の必要を説きましたが、彼れは社會的關係を無視した爲めに、兒童の本能を統御し、訓練することの必要に思ひ到らなかつた、獨りフレーベルは純粹に教育と云ふ着眼點から幼児の遊戯衝動を訓練し、發達せしめねばならないことを深く感じて、其れが爲めに極めて根底の深い組織的な方法を案出したので、其れがかの有名な恩物であります。此れから私は彼れの幼児教育法の根底に横つて居る哲學的原理の説明と其の批評とを致さうと思ひます。

先づ第一に吟味せなければならぬことは、彼れが二十の恩物を案出するに至つた目的は何ぞやと云ふことであります。此れには二つの目的がある。

第一は両親及び教師をして幼児の教育と云ふことに深い興味を持たせ、兼ねて彼等自身にも亦精神



修養の好機會を興へやうと云ふことで、第二は幼
 兒のもの、精神を開發々達せしめやうとするの
 であります。フレーベルは兩親をして一層兒童に
 接觸させねばならない、彼等は兒童と共に遊び、
 共に住まねばならないことを唱へ、而して兩親と
 幼兒との興味の一一致調和を計り、其の居中調停物
 として恩物を用ひたのである。然しながら此の興
 味の一致と云ふことに付異議があらうと思ふ、幼
 兒の興味は幼兒に獨特なもので、大人が其れに同
 することは出來ない、フレーベルは大人は幼兒の
 成長したもので、幼兒は大人の小さなものに過ぎ
 ないと云ひますが、大人と幼兒との差は單に大小
 濃淡の差ではない、程度の差ではなくて、種類の
 差であるのであります。

フレーベルが恩物の構成に就いては、其れを指導
 する一つの大きな原理が其の中にあるのである。
 其れは即ち彼れの哲學的原理で、此の原理に従つ
 て彼れは恩物を案出し、其の排列法を定めたので



あります、彼れの哲學はフイヒテやシエリングの
 同一哲學を取り入れたもので、之れを一言に云ひ
 ますると、宇宙には一つの大きな法則があつて、
 其れが森羅萬象を支配して居る。其れは即ち『發
 達の法則』で、此の發達の法則が、草木土石、禽
 獸蟲魚から吾々人間の自覺的活動までも一切支配
 統御して居る、此の萬物を包含し支配して居る法
 則は必然的に永久普遍の統一體、即ち神に其の根
 據を置いて居るといふのである。そして此の法則
 に従ふと如何なる物でも、如何なる状態でも、如
 何なる性質でも、必ず其れに反對するものが存在
 して居る、例へば物質に對しては精神、自我に對
 しては非我があるやうなものである。然し此の二
 つの反對せるものは何時までも反對として残つて
 居るのではない、其の反對性を包含し調和する統
 一體が其の上にあるのである。そして其の統一體
 にも亦反對性のものがあつて、其の上の統一體が
 又其れを包含し調和する、其れ故此處に二つの反

對物を連結する法則がなければならぬ、斯くして彼れの所謂「連結の法則」が生じたのである、かういふと甚だ六ヶ敷なるのでありますが、彼れの所謂發達の法則は、論理學上で云ふ所の分析綜合の原理に外ならないのであります、以上述べた所から觀ればフレーベルが實物よりも法則を重んじ、其の結果形式論者となり、シンボリストとなつたのは自然の事でありませう。彼れは此の發達の法則を以て、教育上の根本原理となし、教育の柱 (Stoeken und Stab) と呼んで居るのであります。

彼れの哲學上の見解を批評することは私の此の講演に取つて重い關係はないのであります、只彼れが此の『發達の法則』を教育上に如何に適用したか兒童の精神を訓練する材料の上に此の原理をどう用ひたかと云ふことを吟味すれば可いのであります。

フレーベルか恩物を連結的のもの、發達のものとして案出し、排列するに就いては三つの要件を

満足させやうと思つたのである。第一は幼兒の眼前に横はつて居る種々の事物は實に複雑多で、彼等の眼を引き、眩惑させるやうに出来て居る爲め、幼兒が其れに注意を奪はれ、精神を困亂させられないやうにしなければならぬ。次に兒童の注意を物の内部に向けさせねばならない。第三には兒童の注意を自己意識の中に導き入れ、客觀的事物の中に自己の精神生活を觀取し得るやうにしなければならぬ。即ち此の三つの目的を達し得るやうに恩物を構成せねばならぬと云ふのであります。

フレーベルは熱心な自然研究者であります。自然物を沉く觀察し、此れを分類整理して科學的研究を施すことを好んだのであります。其れ故幼兒は目前の木や石や花や鳥に自分の心を眩惑され、彼れより此れと注意を奪はれて、精神を混亂されることを恐れた、適當な方法を以て幼兒の經驗を制限し、少なくとも規整しなければならぬと考

へた、即ち彼等の精神を刺激する無限の事物は能く整頓せられ、科學的にせられることを望んだのである、斯くして兒童と自然物との中間に第三のものを用ひて兩者の關係を鹽梅する必要を認め、此目的に資する第一のものとしてボールを撰んだのであります。ボールを以て恩物の中心となし根本となしたのである。

なせボールを以て恩物の第一としたかと申しますると、ボールは其の形が圓くある、圓満である、遍満して居る姿であります、即ち宇宙の根本原理の形である。兒童をして早くから此の根本原理と云ふことに思ひ到らせることが最も大切であるとフレーベルは考へたのである。次に此のボールから球に進み、球から圓筒に進み、圓筒から他の立體に進み、斯くて彼れの恩物が組織構成せられるので、彼れは此の間に整然たる分拆綜合の原理を應用したのである、少なくとも此の原理に従つて遊戯材料を整列せんと努めたのである。斯くして

易きより難きに、己知より未知に、單純から複雑に達せんとしたのである。

フレーベルは兒童が自然物の爲めに其の精神を眩惑せられ、注意を擾亂せられるのを恐れて恩物と云ふ第三者を採用したことは今日から之れを觀て賛成することが出来ないのである。第一兒童の精神は彼れの考へたやうに深い眠から突然覺めて、俄かに自然物の爲めに惑亂せられるといふやうなものでは無いのであります。まだ複雑な經驗を受け容れるだけの素地がないのである。次に自然物と直接に接觸するといふことを除いては兒童の精神を開發することは甚だ困難である。自然物に接觸することを避けさせて、符號や模型で教育しやうとするは其の方法を誤つて居る。石や木や水や山を直接に觀、直接に接することが最も必要であります。實物教授は幼兒に取つて極めて大切なのであります。

只今申上げました事と關聯して、私は最後にフ

ーベルの論理法に就いて一言述べやうと思ひます。前に述べましたやうに、幼兒の精神を訓練する材料を論理學上の分拆綜合の原理に従つて排列すると云ふことは、彼れの教育主義の根本を爲して居るのである。ボールは最も簡單なものを代表し、それより球、球から圓筒と順次論理的の關係を以て進んで居る。諸の恩物は分拆綜合の整然たる秩序を追ふて排列せられて居るのである。斯る排列法が教育上如何なる價値を持つて居るか云ふことを問ふのは今日尙の至りであり、三歳より六歳に至るまでの幼兒の精神が果して斯る論理的の秩序を以て實際に働くか、どうかと云ふことは充分之れを吟味する價値があらうと思ふのであります。

申すまでもなく論理學は觀念間の關係を規定する學問で、其の法則は實際の事物と多く關する所がないのであります、全く形式的のものであります。そこで三歳より六歳までの幼兒が果して能く斯る

論理的綜合と分拆とを受け容れる能力があるでありませうか、論理的抽象的の考へ方は餘程成長して後發達するもので、此の年輩の兒童にあつては彼等の周圍の事物を見たり、聞いたり、嗅いだり觸れたりすることが其の全能力である。彼等は性質に依つて事物を連結するのではなく、同じ場所にあるとか、引續いて起つたとか云ふ時間と空間との關係に依つて物事を連結するのである。子供は實物から離れて色丈けを精神の中に收めて置く云ふことは出来ない。之れは單に色のみではなく、數に付いても、形に就いても又は性質に就いても、實物から抽象して其れを認めることは出来ないものであります。論理的抽象的の能力を發達させることは適當な時期に於いては極めて大切なことであります、其の時期を誤つては益のない所か、却つて害になるのであります。

遊戯材料を撰擇し、排列するに二つの方法があります、其れは論理的方法と、心理的方法であ

る。此れは畫に就いて例を取ると能く明かになるのである、論理的の方法に従うと、畫は直線から始めなければならぬ、直線が最も簡單で、總べての基礎となつて居るのである。一直線を引いたならば、次に反對の所に又一本の直線を引き終りに其れを結び付けるのが其の順序であります。然し心理的方法、即ち自然的方法に依ると決してさうではない、子供が始めて畫を書く時に直線を引くでせうか、決して直線は引きません。曲りくねつたものを引きます、若し直線が出来れば其れは全く偶然で、然も其れが彼れの意志に反いたものであります、幼兒は斯る直線とも曲線とも就かないものを引いて、彼れの周圍にある實物を寫さうとするのである。普通は人を描くもので、一個の圓に二本の線を引いて、其れで以て人が書けた積りで喜んで居るのであります。此れを以て觀てもフレーベルの論理的方法に依つて組織構成せられた恩物が、幼兒の精神中に實際働いて居る方法と大に異つて居るとが分るのであります。

子供の友一茶

倉橋生

「親のない子は何處でも知れる

爪を唾へて門に立つ」

三才にして母に逝かれて、一茶はその時から悲哀の人となつた。信濃の國芙蓉湖のほとり、柏原村の夕暮は、さなきだに山國の秋が冷い。その秋風の冷い門に、爪を唾へては獨り淋しく立つ、幼い一茶の姿が目に見えて来る。一茶の幼名を彌太郎といふ。彼の有名な

我と來て遊べや親のない雀

の句は、孤兒彌太郎が六才の折の切ない聲である一茶は後に、その頃のつらい思ひを追懷して書いて居る。

親のない子は何處でも知れる、爪を唾へて門に立つと子供等に唄はるゝも心細く、大かたの人